



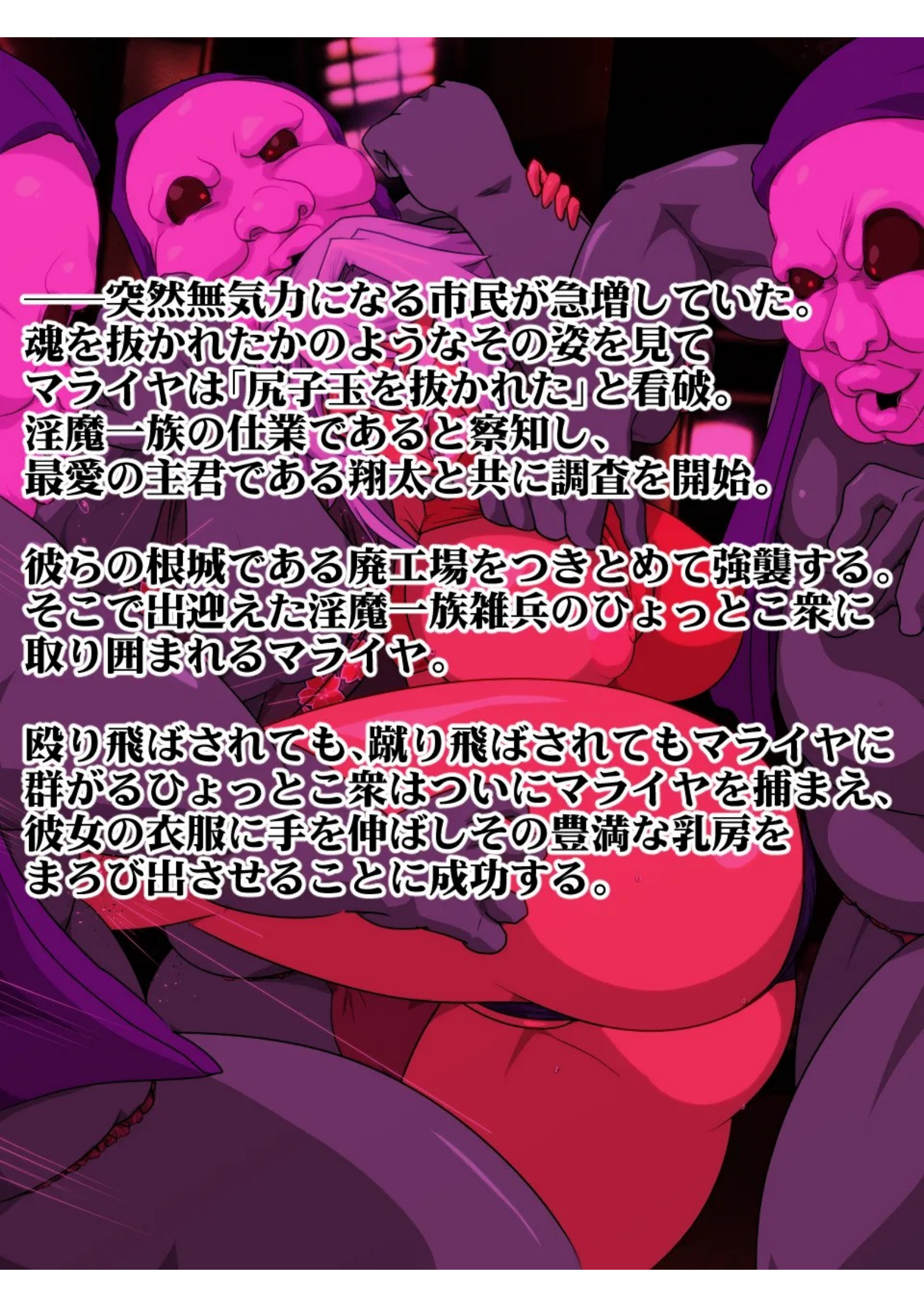
正義の爆乳変身忍者ヒロインが

卑劣な肥満河童怪人に
恋人を人質に取られて

戦者忍退魔

マライヤ
2

無理矢理奉仕!!!



——突然無気力になる市民が急増していた。
魂を抜かれたかのようなその姿を見て
マライヤは「尻子玉を抜かれた」と看破。
淫魔一族の仕業であると察知し、
最愛の主君である翔太と共に調査を開始。

彼らの根城である廃工場をつきとめて強襲する。
そこで出迎えた淫魔一族雑兵のひょっこ衆に
取り囲まれるマライヤ。

殴り飛ばされても、蹴り飛ばされてもマライヤに
群がるひょっこ衆はついにマライヤを捕まえ、
彼女の衣服に手を伸ばしその豊満な乳房を
まるび出させることに成功する。

だああああっ!!
うっとうしいッ!!

失せんか
下郎どもがあっ!!

ぴゅっ♡

人

人

それでも抵抗するマライヤ。
その隙を狙ってひょっとこの一人が
彼女の乳房めがけ顔を突っ込ませ
その頂点に吸い付く。

「むっほう！！」

野太い喘ぎ声が響く。
その場にいたひょっとこ衆が気づいたときには
捉えていたはずのマライヤが
ひょっとこの一人に代わっていた。
胸を吸い付かれたひょっとこは恍惚に顔を赤らめ、
吸い付いてしまったひょっとこは絶望に
顔を青らめて泡を吹いて倒れた。

「拝帝院忍法空蟬の術——愚かなりひょっとこ衆！」

マライヤの声はその場にこだまする。
周囲を見回すひょっとこ衆。
しかしマライヤの姿は見えず。
「どこを見ているどこを見ている！」
果たしてその声は、はるか頭上からのものだった。
ひょっとこ衆達が見上げる。



くはははっ
愚か者どもめ！

わしは、いじゃー！



拜帝院忍者

マ
ラ
イ
ヤ

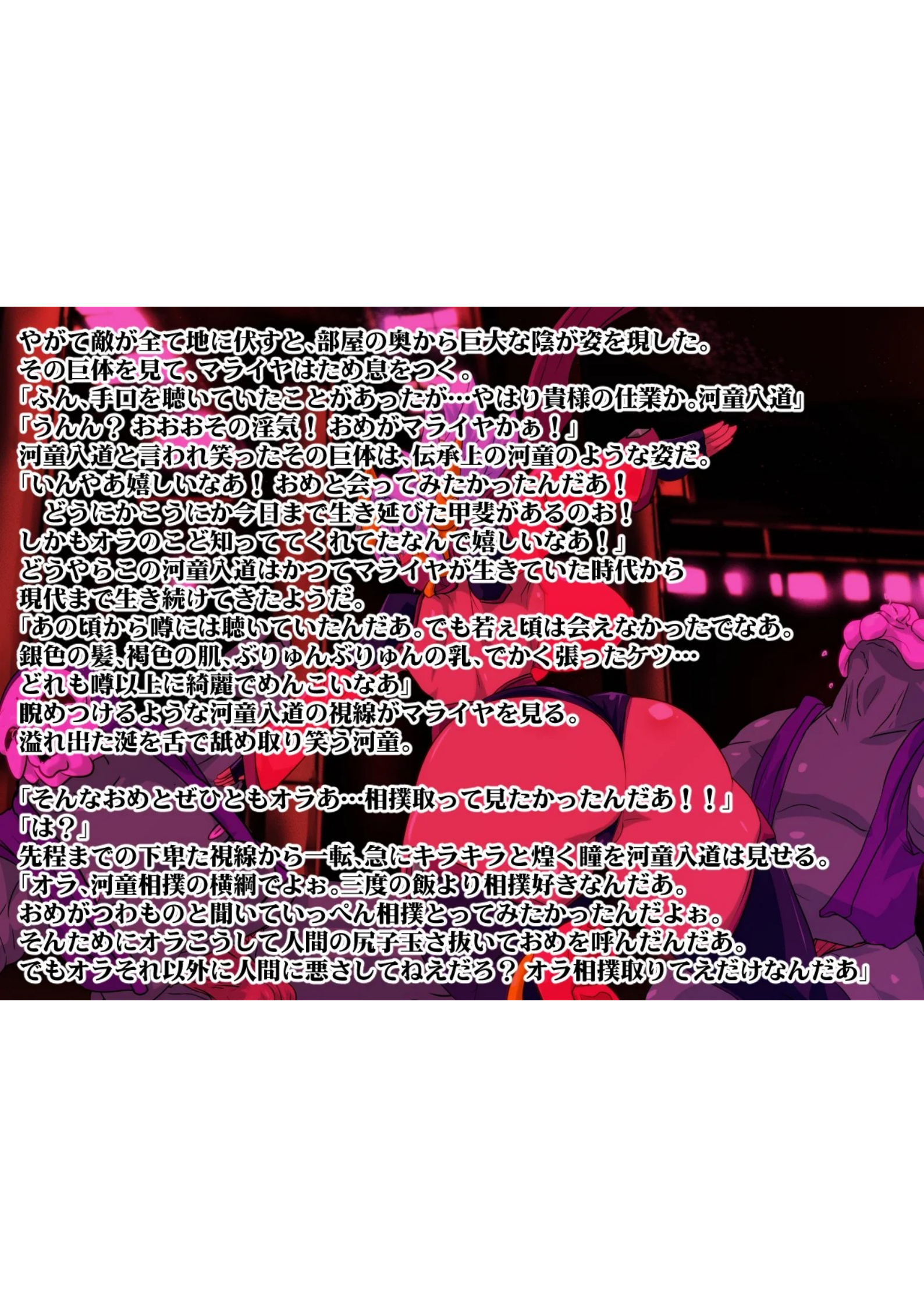


地上に降り立ったマライヤは、
変幻前の状態よりも更に俊敏に
動き、ひょっとこ達を圧倒していく。

どうにか彼女を捉えようと飛びかかる
ひょっとこの腕はその都度虚しく宙を切る。

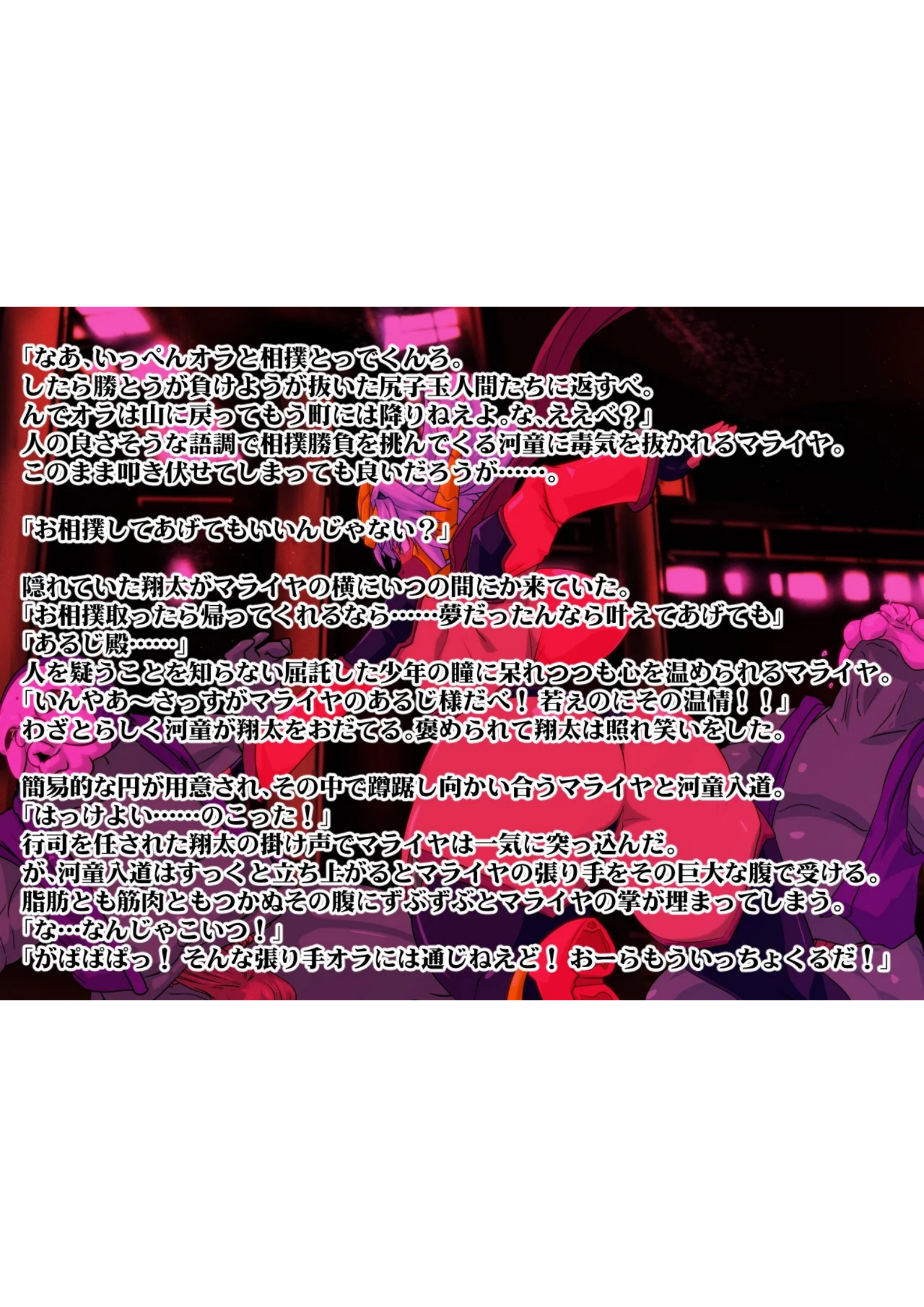
右往左往する雑魚集団をマライヤは
その手刀で薙ぎ倒す。





やがて敵が全て地に伏すと、部屋の奥から巨大な陰が姿を現した。
その巨体を見て、マライヤはため息をつく。
「ふん、手回を聴いていたことがあったが…やはり貴様の仕業か。河童入道」
「うん？ おおおその淫気！ おめがマライヤかあ！」
河童入道と言われ笑ったその巨体は、伝承上の河童のような姿だ。
「いんやあ嬉しいなあ！ おめと会って見たかったんだあ！
どうにかこうにか今日まで生き延びた甲斐があるのお！
しかもオウのこど知っててくれてたなんで嬉しいなあ！」
どうやらこの河童入道はかつてマライヤが生きていた時代から
現代まで生き続けてきたようだ。
「あの頃から噂には聴いていたんだあ。でも若え頃は会えなかったでなあ。
銀色の髪、褐色の肌、ぶりゅんぶりゅんの乳、でかく張ったケツ…
どれも噂以上に綺麗でめんこいなあ」
睨めつけるような河童入道の視線がマライヤを見る。
溢れ出た涎を舌で舐め取り笑う河童。

「そんなおめとぜひともオウあ…相撲取って見たかったんだあ！！」
「は？」
先程までの下卑た視線から一転、急にキラキラと煌く瞳を河童入道は見せる。
「オウ、河童相撲の横綱でよお。三度の飯より相撲好きなんだあ。
おめがつわものと聞いていっぺん相撲とって見たかったんだよお。
そんなためにオウこうして人間の尻子玉さ抜いておめを呼んだんだあ。
でもオウそれ以外に人間に悪さしてねえだろ？ オウ相撲取りでえだけなんだあ」



「なあ、いっぺんオラと相撲とってくんろ。
したら勝とうが負けようが抜いた尻子玉人間たちに返すべ。
んでオラは山に戻ってもう町には降りねえよ。な、ええべ？」
人の良さそうな語調で相撲勝負を挑んでくる河童に毒気を抜かれるマライヤ。
このまま叩き伏せてしまっても良いだろうが……。

「お相撲してあげてもいいんじゃない？」

隠れていた翔太がマライヤの横にいつの間にか来ていた。
「お相撲取ったら帰ってくれるなら……夢だったんなら叶えてあげても」
「あるじ殿……」

人を疑うことを知らない屈託した少年の瞳に呆れつつも心を温められるマライヤ。
「いんやあ～さっすがマライヤのあるじ様だべ！ 若えのにその温情！！」
わざとらしく河童が翔太をおだてる。褒められて翔太は照れ笑いをした。

簡易的な円が用意され、その中で蹲踞し向かい合うマライヤと河童入道。
「はっけよい……のこった！」

行司を任された翔太の掛け声でマライヤは一気に突っ込んだ。
が、河童入道はすっと立ち上がるとマライヤの張り手をその巨大な腹で受ける。
脂肪とも筋肉ともつかぬその腹にずぶずぶとマライヤの掌が埋まってしまう。

「な…なんじゃこいつ！」

「がぼぼっ！ そんな張り手オラには通じねえど！ おーらもういっちょくるだ！」

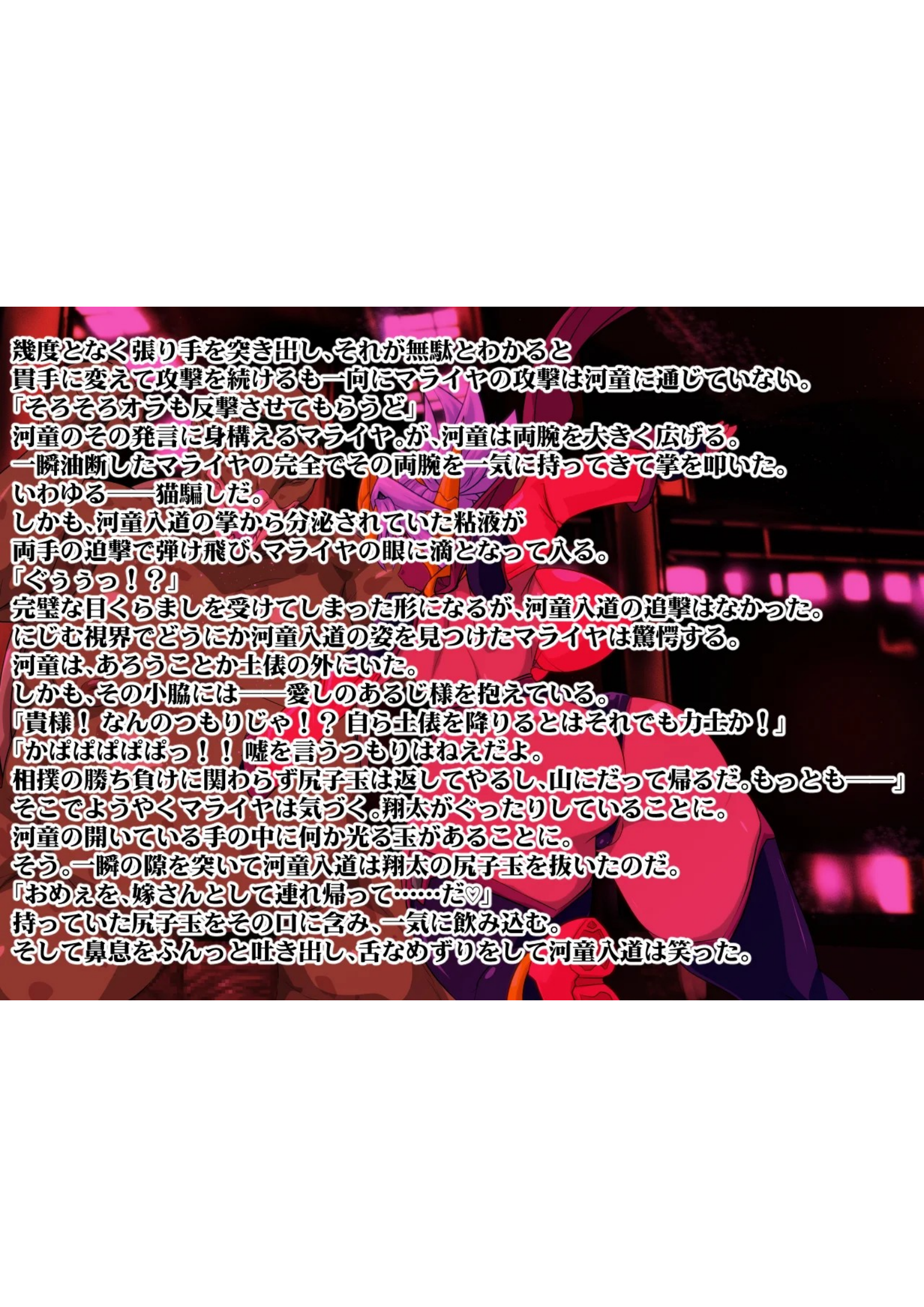


ガパパパッ
どうしただあ!?

そんな攻撃
ちいっども
効いてねえだぞお

ちい...!!

ドス
ズムッ



幾度となく張り手を突き出し、それが無駄とわかると
貫手に変えて攻撃を続けるも一向にマライヤの攻撃は河童に通じていない。
「そろそろオラも反撃させてもらうぞ」
河童のその発言に身構えるマライヤ。が、河童は両腕を大きく広げる。
一瞬油断したマライヤの完全でその両腕を一気に持ってきて掌を叩いた。
いわゆる——猫騙しだ。
しかも、河童入道の掌から分泌されていた粘液が
両手の迫撃で弾け飛び、マライヤの眼に滴となって入る。
「ぐううっ!？」
完璧な目くらましを受けてしまった形になるが、河童入道の迫撃はなかった。
にじむ視界でどうにか河童入道の姿を見つけたマライヤは驚愕する。
河童は、あろうことか土俵の外にいた。
しかも、その小脇には——愛しのあるじ様を抱えている。
「貴様! なんのつもりじゃ!? 自ら土俵を降りるとはそれでも力主か!」
「かばばばばっ!! 嘘を言うつもりはねえだよ。
相撲の勝ち負けに関わらず尻子玉は返してやるし、山にだって帰るだ。もっとも——」
そこでようやくマライヤは気づく。翔太がぐったりしていることに。
河童の開いている手の中に何か光る玉があることに。
そう。一瞬の隙を突いて河童入道は翔太の尻子玉を抜いたのだ。
「おめえを、嫁さんとして連れ帰って……だ♡」
持っていた尻子玉をその口に含み、一気に飲み込む。
そして鼻息をふんっと吐き出し、舌なめずりをして河童入道は笑った。

「ん……くっ……ふうっ……」

水音と荒いマライヤの呼吸が響く。
今、マライヤは河童入道に抱きつき、
彼の伸ばす歪んだ色の舌に自らの舌を絡ませていた。
「ぱぱっ、どしたあ？ もっと気合い入れてやんねえと
あるじ様の尻子玉完全に飲み込んじゃうぞお？」
翔太の、そして襲われた人々の尻子玉はすべて
河童入道の体内にあるという。

これはマライヤも霊力を察知して確認している。
が、河童が完全に飲み込む——体内のエネルギーに
変換してしまえば二度と復元できないという。
人々の、そして愛するあるじ様の魂と言ってもいいものを
人質に取られ、マライヤは仕方無しに河童の
言いなりになっていた。

「昔からおめのこと音に聴いて嫁さんにしてえと
思ってたただあ。でもおめは霊力強えからオラの
尻子玉抜きは通じねえしなあ。
だからよ、今回の作戦考えたんだ。おらあ頭いいだろお？」
河童の勝ち誇った話には反応せず、
ひたすら舌を動かすマライヤ。

「もっと嬉しそうにしるよお」
言いながら、河童は左手でマライヤの胸を、
右手で尻をまさぐる。それだけでマライヤの敏感な軀は
びくりと反応し、思わず、視線を横に流してしまう。

「ん～～？ おお、見てくれてるぞお、あるじ様——いや
元あるじ様だなあ。あるじ様は今日からオラだからなあ」
河童の言葉通り、吊るされた翔太がぼんやりと
二人の絡み合いを見ていた。
尻子玉を抜かれているため、そこに意識は無いだろうが
……それでも、マライヤにはその視線が痛い。

カパパッ
どしだ？
息が荒えぞお♡

き…貴様の口が
臭いから…んっ
呼吸を浅くして
いるだけ…だッ…

ちくびと
ケツ揉むたびに
震えてくるせに
強がっちゃうって
めんどいなあ♡

もみもみ♡

チヤッ♡

ビッ♡

甘え声出すように
なっただなあ♡
そんなにオラとの
接吻が気持ちええか？

んんっ…

はっ♡

はっ♡

はっ♡

んんっ…
んふう…っ♡

オハ♡

……♡

ふざ……けっ
そんなワケが
……なあ……

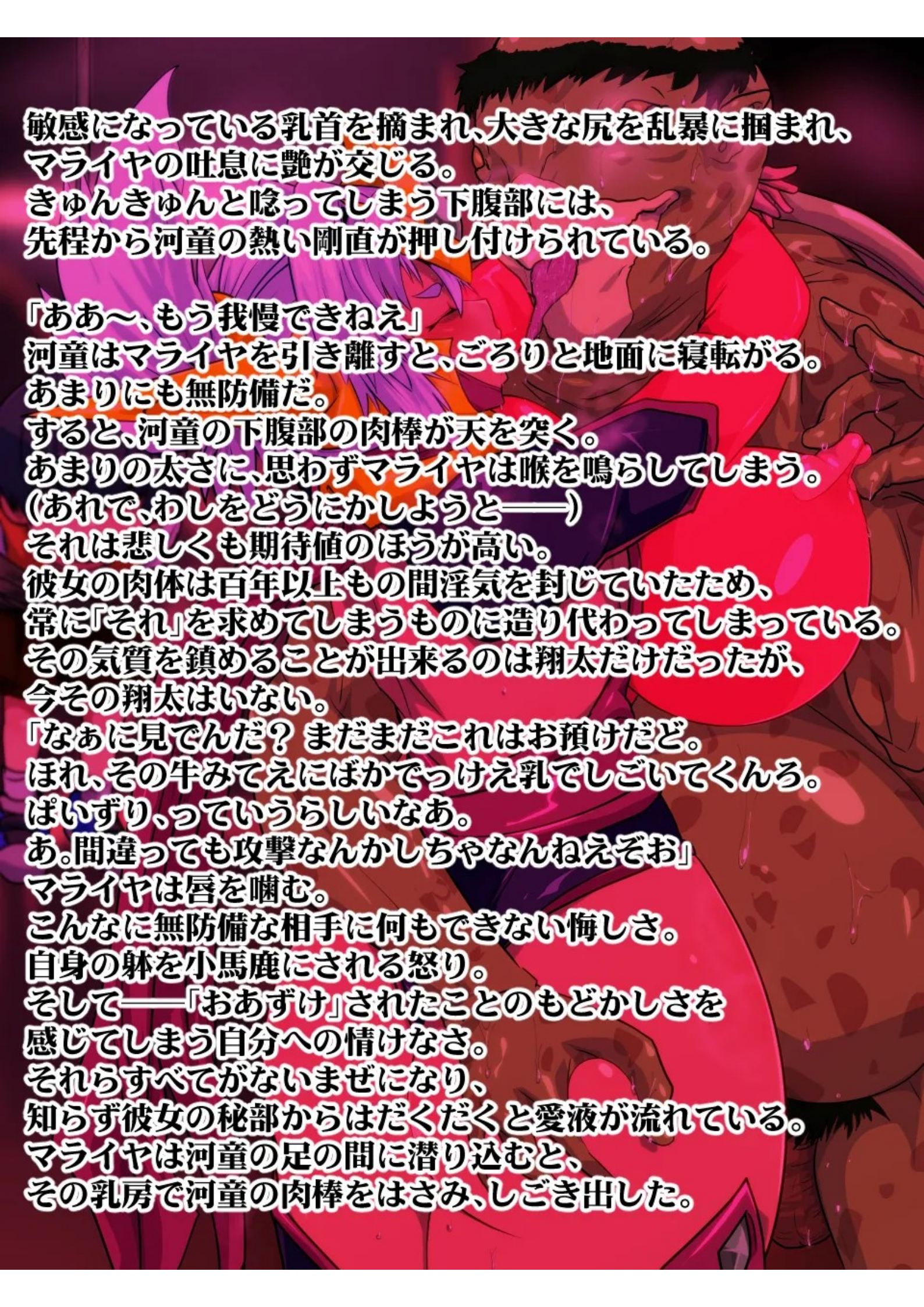
んんっ♡
あっ♡

ヤン♡

はっ♡

ぎゅっ♡
ううっ♡
ううっ♡

ええどええど♡
もっと強がっでも
よがっちまうのが
隠せてねえなあ♡



敏感になっている乳首を摘まれ、大きな尻を乱暴に掴まれ、
マライヤの吐息に艶が交じる。
きゅんきゅんと唸ってしまう下腹部には、
先程から河童の熱い剛直が押し付けられている。

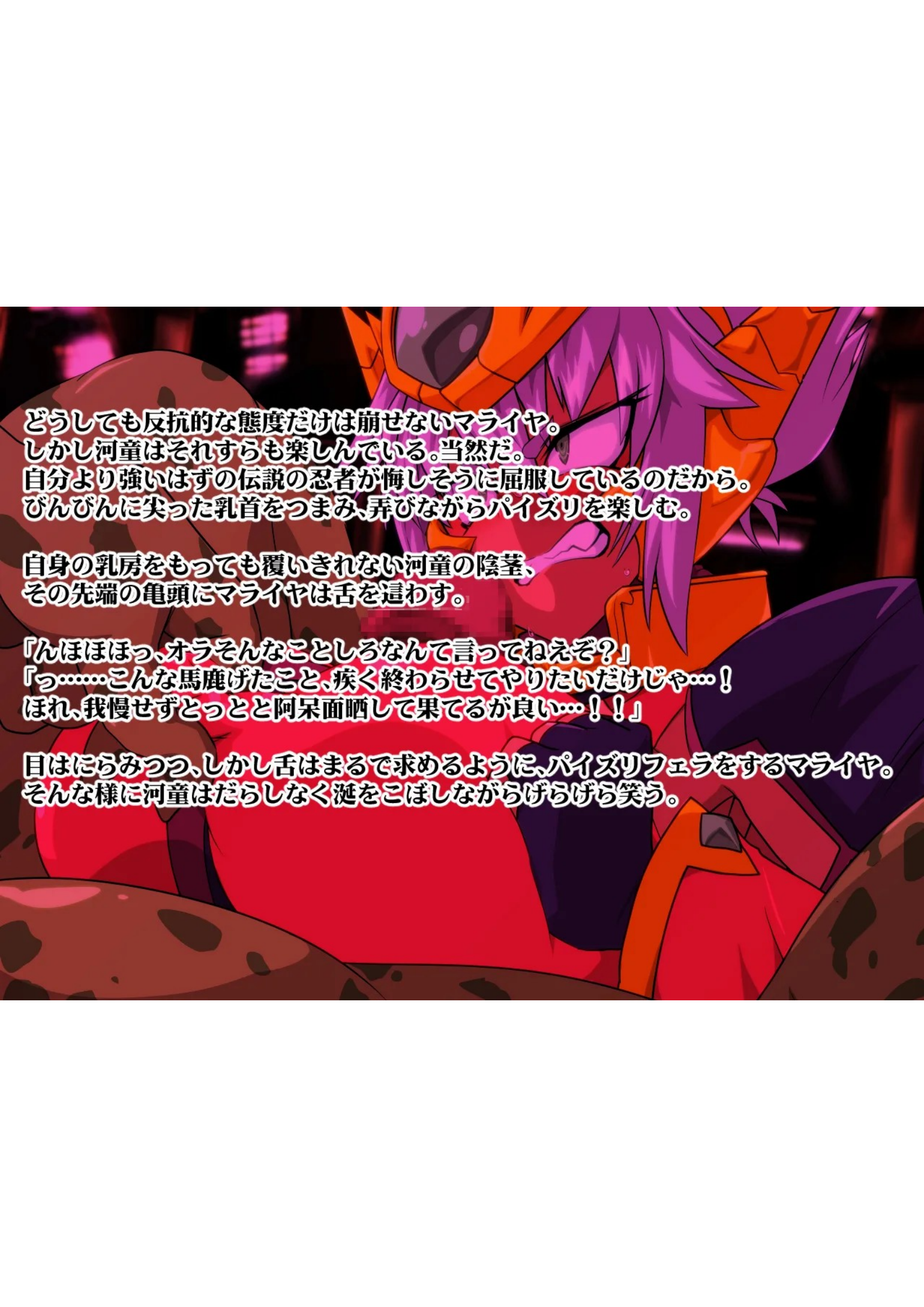
「ああ～、もう我慢できねえ」
河童はマライヤを引き離すと、ごろりと地面に寝転がる。
あまりにも無防備だ。
すると、河童の下腹部の肉棒が天を突く。
あまりの太さに、思わずマライヤは喉を鳴らしてしまう。
(あれで、わしをどうにかしよう——)
それは悲しくも期待値のほうが高い。
彼女の肉体は百年以上もの間淫気を封じていたため、
常に「それ」を求めてしまうものに造り代わってしまっている。
その氣質を鎮めることが出来るのは翔太だけだったが、
今その翔太はいない。
「なあに見でんだ？ まだまだこれはお預けだど。
ほれ、その牛みてえにばかでっけえ乳でしごいてくんろ。
ぱいずり、っていうらしいなあ。
あ。間違っても攻撃なんかしちゃんねえぞお」
マライヤは唇を噛む。
こんなに無防備な相手に何もできない悔しさ。
自身の軀を小馬鹿にされる怒り。
そして——「おあずけ」されたことのもどかしさを
感じてしまう自分への情けなさ。
それらすべてがないまぜになり、
知らず彼女の秘部からはだくだくと愛液が流れている。
マライヤは河童の足の間に潜り込むと、
その乳房で河童の肉棒をはさみ、しごき出した。

いやあいい乳圧だあ♡
思ったとおり乳コキ向きの
でっけえ乳だあなあ♡

っ…その薄汚い
口を閉じろ…!!

さっきあんなに
口吸い合ったのに
何言ってるんだあ?
あのガキの尻子玉
食っちゃうぞお?





どうしても反抗的な態度だけは崩せないマライヤ。
しかし河童はそれすらも楽しんでいる。当然だ。
自分より強いはずの伝説の忍者が悔しそうに屈服しているのだから。
びんびんに尖った乳首をつまみ、弄びながらパイズリを楽しむ。

自身の乳房をもっても覆いきれない河童の陰茎、
その先端の亀頭にマライヤは舌を這わす。

「んほほほっ、オラそんなことしろなんて言ってねえぞ？」
「っ……こんな馬鹿げたこと、疾く終わらせてやりたいだけじゃ…！
ほれ、我慢せずとっとと阿呆面晒して果てるが良い…！！」

目はにらみつつ、しかし舌はまるで求めるように、パイズリフェラをするマライヤ。
そんな様に河童はだらしなく涎をこぼしながらげらげら笑う。

く 臭いっ…
鼻が曲がりそうじゃっ…
なのにこの臭いを
嗅いでいると頭が…
体が火照ってしまっ…♡

おああ良いだあ♡
良いだよおお♡
気持ちええだなあ♡

うっ…

だっ♡

だっ♡

しゃにゅ♡
しゃにゅ♡
しゃにゅ♡

あつと言う間に
イっちゃうう♡
顔にぶっかけて
やるだぞおお♡



ぶ射オ
つ精オ
かけるッオ
ビ

ビッ♡

お♡

しゃッ♡

♡♡♡♡♡

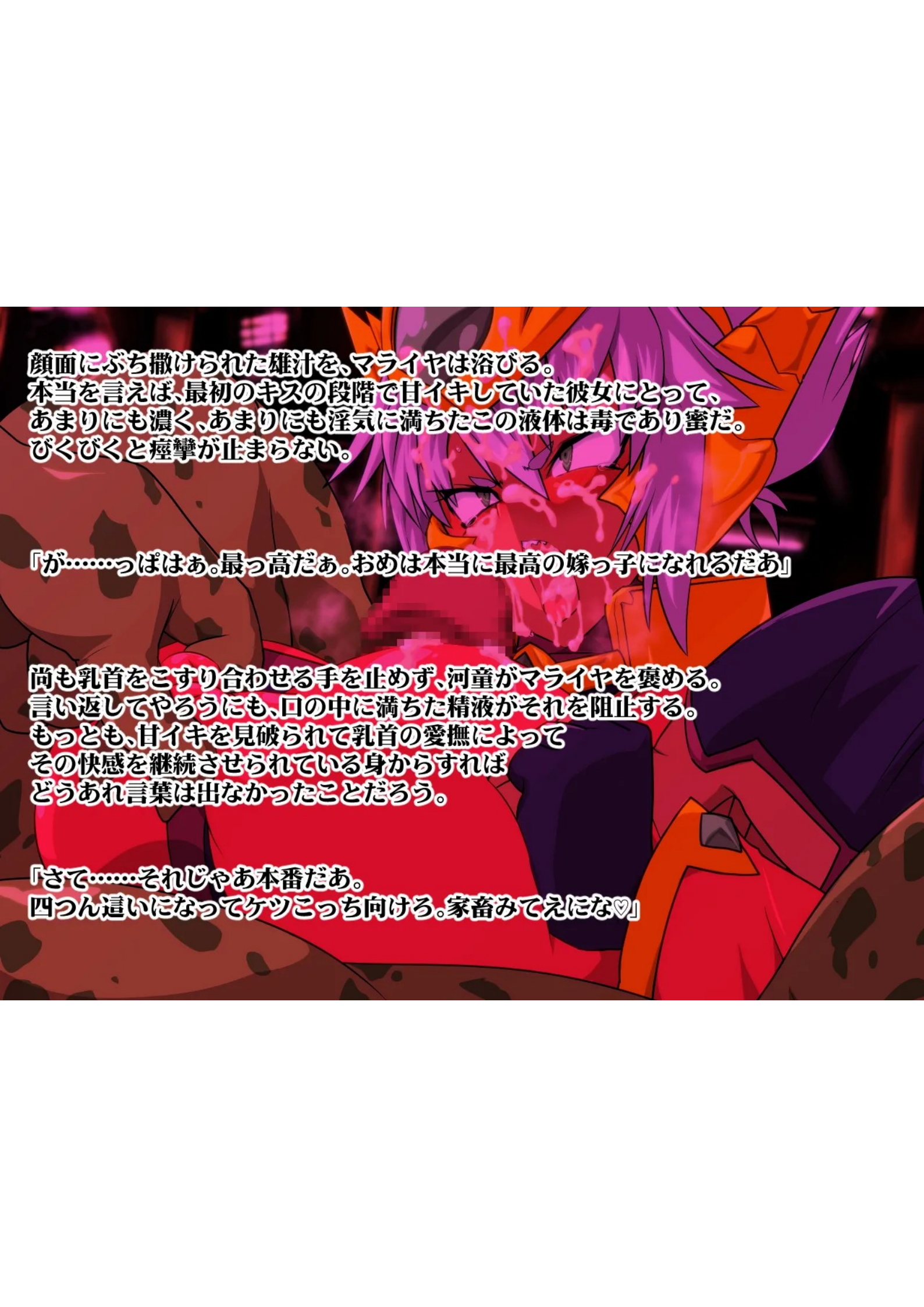
ん♡

おほ♡良い顔だあ♡
口開けて子種汁
見せてみる♡

まだ飲み込むなよお
しっかり味わえよお
濃いいだろお？

そのめったら
濃いい子種汁を
このあとおめえの
まんこにだつぷり
注いでやるがんなあ♡



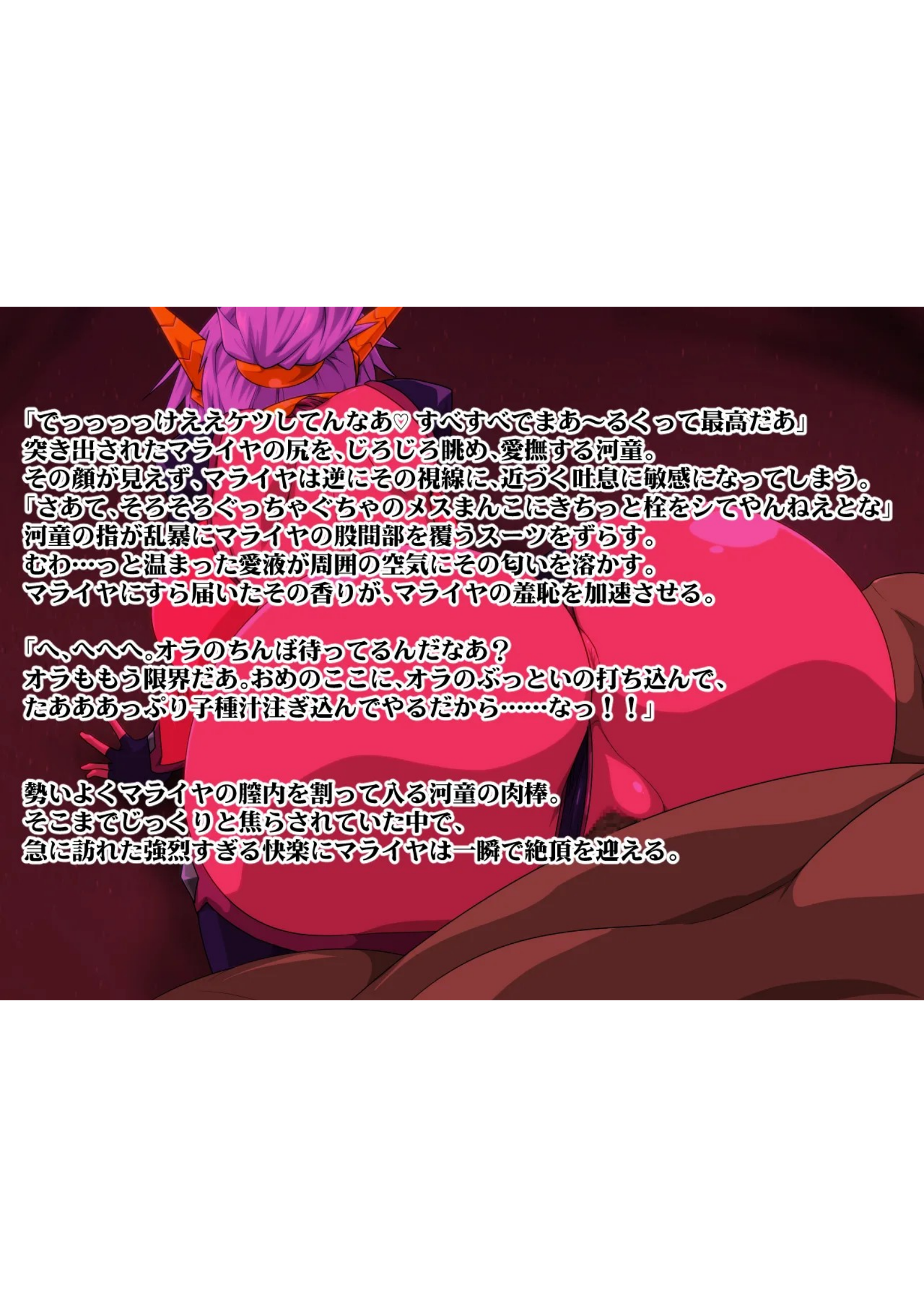


顔面にぶち撒けられた雄汁を、マライヤは浴びる。
本当を言えば、最初のキスの段階で甘イキしていた彼女にとって、
あまりにも濃く、あまりにも淫気に満ちたこの液体は毒であり蜜だ。
びくびくと痙攣が止まらない。

「が……っぱはあ。最っ高だあ。おめは本当に最高の嫁っ子になれるだあ」

尚も乳首をこすり合わせる手を止めず、河童がマライヤを褒める。
言い返してやろうにも、口の中に満ちた精液がそれを阻止する。
もっとも、甘イキを見破られて乳首の愛撫によって
その快感を継続させられている身からすれば
どうあれ言葉は出なかったことだろう。

「さて……それじゃあ本番だあ。
四つん這いになってケツこっち向ける。家畜みてえにな♡」



「でっっっつけええケツしてんなあ♡ すべてでまあ〜るくって最高だあ」
突き出されたマライヤの尻を、じろじろ眺め、愛撫する河童。
その顔が見えず、マライヤは逆にその視線に、近づく吐息に敏感になってしまう。
「さあて、そろそろぐっちゃぐちゃのメスまんこにきちっと栓をシてやんねえとな」
河童の指が乱暴にマライヤの股間部を覆うスーツをずらす。
むわ…っと温まった愛液が周囲の空気にその匂いを溶かす。
マライヤにすら届いたその香りが、マライヤの羞恥を加速させる。

「へ、へへへ。オラのちんぼ待ってるんだなあ？
オラももう限界だあ。おめのここに、オラのぶっといの打ち込んで、
たあああっぷり子種汁注ぎ込んでやるだから……なっ！！」

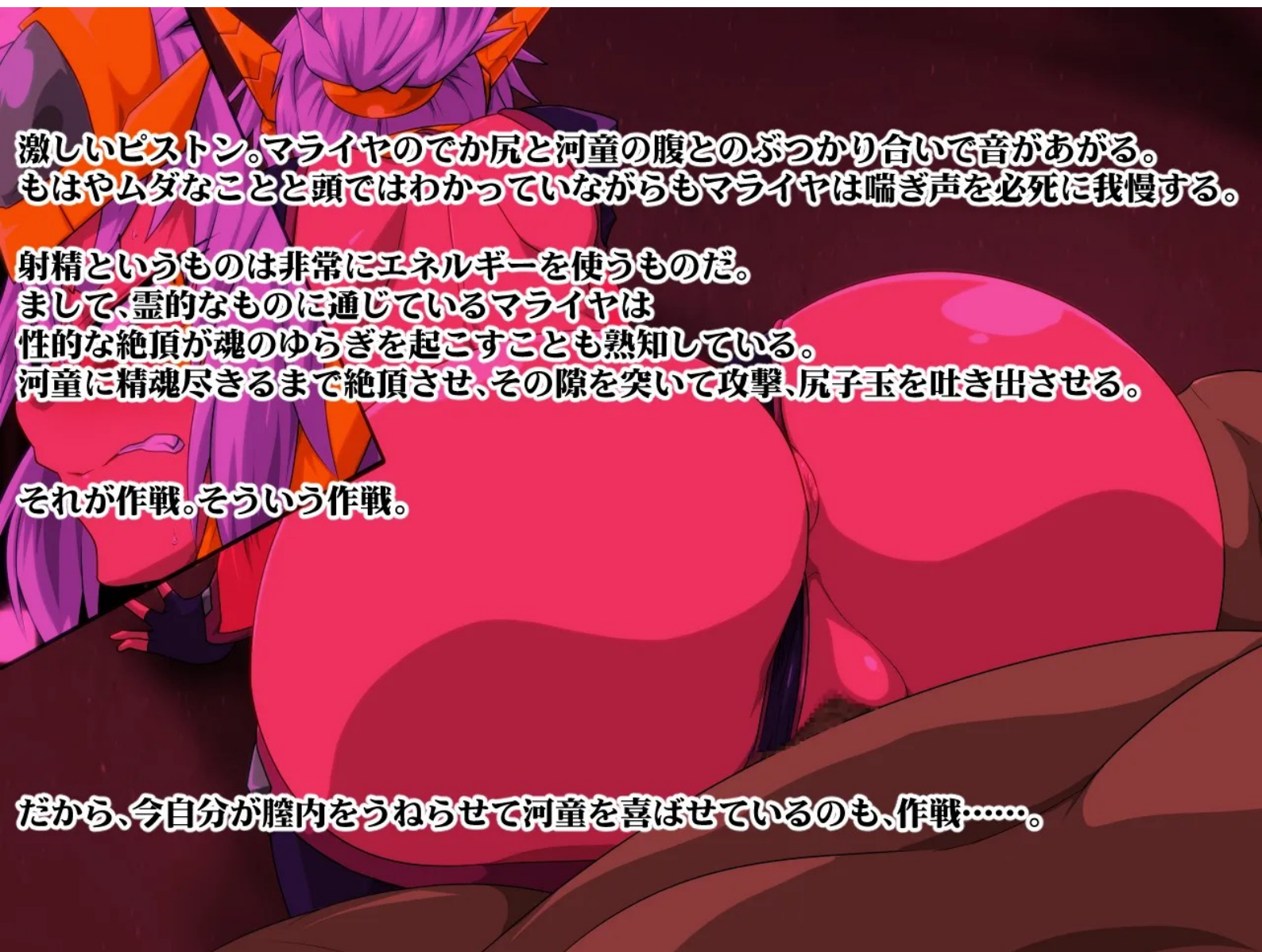
勢いよくマライヤの膣内を割って入る河童の肉棒。
そこまでじっくりと焦らされていた中で、
急に訪れた強烈すぎる快楽にマライヤは一瞬で絶頂を迎える。



おつ...ほおお♡

これがあのマライヤ様のおまんこがああ♡
あつだがつて
びっちょびちよだあ♡

おめえざんもおらのちんぽ楽しんでた証拠だなあ♡



激しいピストン。マライヤのでか尻と河童の腹とのぶつかり合いで音があがる。
もはやムダなことと頭ではわかっていながらもマライヤは喘ぎ声を必死に我慢する。

射精というものは非常にエネルギーを使うものだ。
まして、霊的なものに通じているマライヤは
性的な絶頂が魂のゆらぎを起こすことも熟知している。
河童に精魂尽きるまで絶頂させ、その隙を突いて攻撃、尻子玉を吐き出させる。

それが作戦。そういう作戦。

だから、今自分が膣内をうねらせて河童を喜ばせているのも、作戦……。

ああああイイ!!
最っ高のしまりだあ♡

突くたびデカケツが
ぶるんぶるんしてよ♡

このまんことケツなら
オラのややこも

いっぺえ
産んで
もらえるなあ♡





パン！！

ぶつかり合うたび震える褐色の尻に目をつけた河童は突然、その手でそれを叩いた。
痛みというここまでになかった刺激に、マライヤの体が跳ねる。

その反応は悪辣河童を悦ばせるのに十分なものだった。



ケツ叩きに
合わせてまんこが
きゅうきゅうしてるとど！

拜帝院忍者
なんて御大層な
あざ名じゃなくて
淫乱牝豚ケツ太鼓
がお似合いだなあ

きゅうきゅう

マライヤの躰は神経の殆どを性的な快楽に味わえるような造りになっている。それは、こんな尻叩き……スパンキングであっても。叩かれるたび、膣内を突かれるたび、マライヤの躰は細かな絶頂に至ってしまう。

「くひいっ!？」

思わずマライヤから生娘のような声があがった。

河童の空いていた手が、性感帯の中でもトップクラスに入る乳首を強引に摘み上げたからだ。

更に河童は、自身の口に手を突っ込むと、何かを取り出した。

彼の唾液に濡れて光るそれは、彼が飲み込んだ尻子玉がカエルの卵のように紐状に繋がったものだ。現代でいうアナルビーズの形になっている。

その先端をヒクつくマライヤのアナルにあてがう。

一瞬、謎の感覚に怯えるマライヤだったが、次の瞬間には

河童が一気に尻子玉ビーズを尻穴へと押し込んでいき、

怯えが快楽に吹き飛ばされた。河童の能力により、まるでそれ自体が意思を持っているかのようにうねり、出たり入ったりを繰り返す。

人の魂とも言える尻子玉をそのような形で使う悪辣な河童。

しかし、その尻子玉の中には翔太のそれも混じっている。

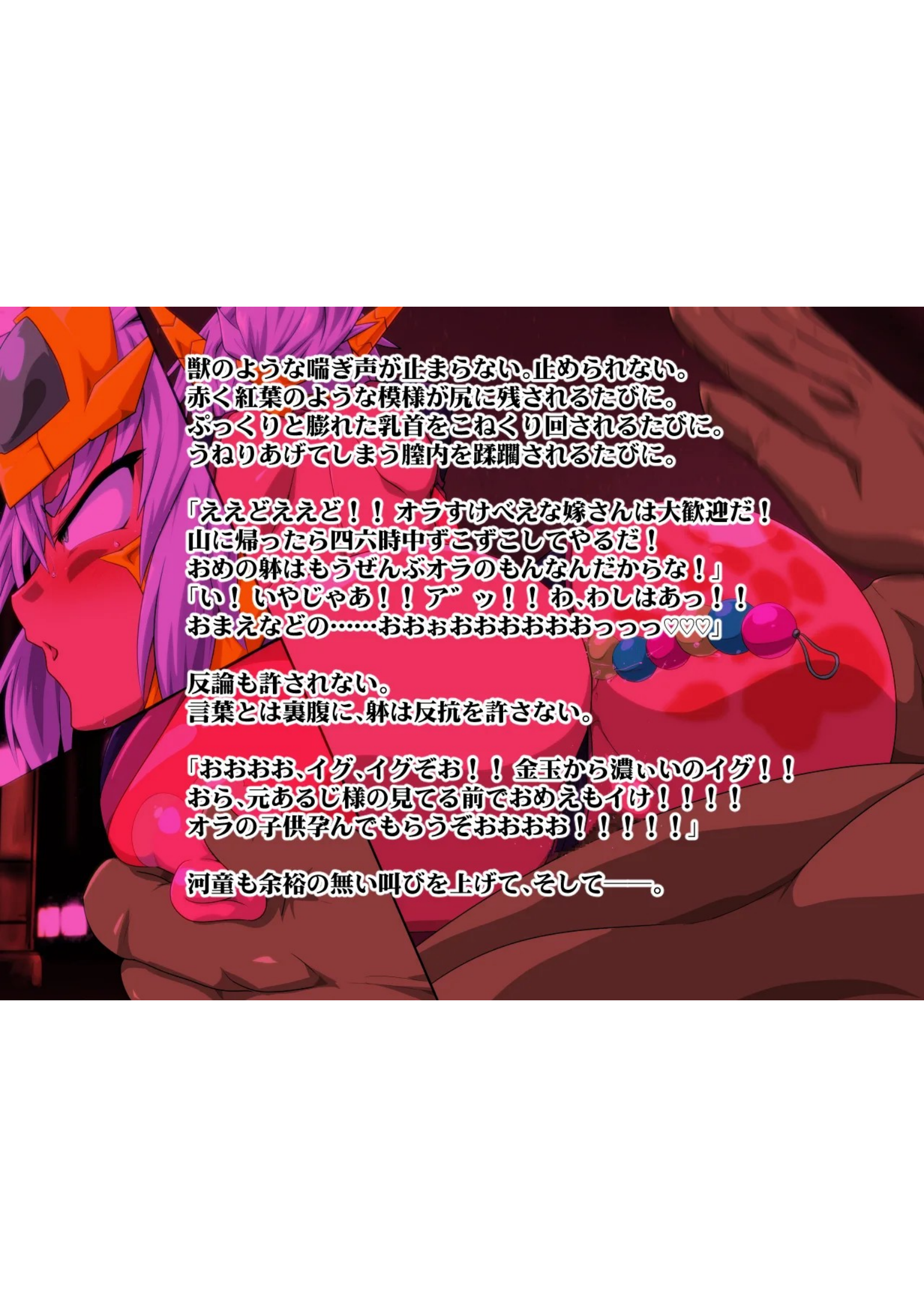
マライヤと陰陽の対をなす翔太の魂が直接マライヤの腸内を行き来するのは、彼との性交を思わせてマライヤをさらなる昂りへといざなっていく。

尻叩き、乳首つまみ、アナルビーズ、そして肉棒の直接攻撃。

四重の快楽が一度にマライヤを襲う。理性が弾け飛んでいく。

翔太の尻子玉を河童が手放しているという状況にも気づけない。





獣のような喘ぎ声が止まらない。止められない。
赤く紅葉のような模様が尻に残されるたびに。
ぷっくりと膨れた乳首をこねくり回されるたびに。
うねりあげてしまう膣内を蹂躪されるたびに。

「ええどええど！！オラすけべえな嫁さんは大歓迎だ！
山に帰ったら四六時中ずこずこしてやるだ！
おめの躰はもうぜんぶオラのもんなんだからな！」
「い！いやじゃあ！！アッ！！わ、わしはあっ！！
おまえなどの……おおおおおおおっっ♡♡♡」

反論も許されない。
言葉とは裏腹に、躰は反抗を許さない。

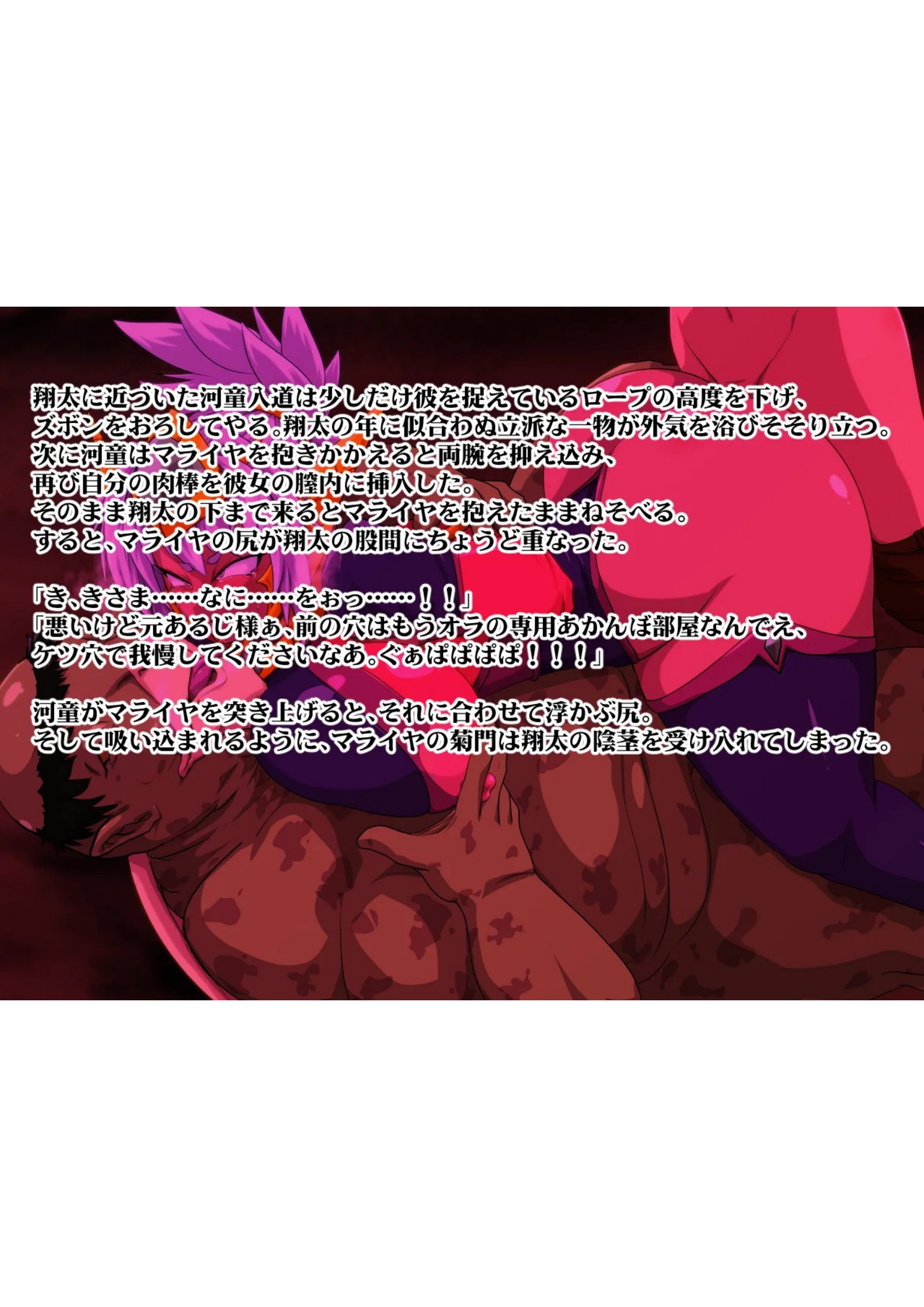
「おおおお、イグ、イグぞお！！金玉から濃いいのイグ！！
おら、元あるじ様の見てる前でおめえもイけ！！！！
オラの子供孕んでもらうぞおおおお！！！！」

河童も余裕の無い叫びを上げて、そして――。



「ぐ、ぱぱあ……ほんとおに、最高おだあ。おめえの躰は最高だあ」
最後まで射精しきった河童はゆっくりとマライヤから離れる。
大量の精液が逆流して、まるでマライヤが射精したかのような勢いでこぼれた。
絶頂の快楽に力の入らぬマライヤは無様に尻だけが持ち上がった形で崩れ落ちる。
河童が尻子玉ビーズを引きずり出すと、マライヤが短く「おっ」と喘いだ。
その後、河童は尻子玉ビーズを飲み込み、再びマライヤに覆いかぶさろうとし——
止まった。

「——ぐぱぱぱぱぱぱ！！こりゃあおもしれえなあ！！」
侮蔑を込めたような河童の笑い方に、
マライヤは辛うじて顔をあげ、彼の視線を追った。
その先には——吊るされている翔太の姿があり、思わず愕然とする。
翔太の半ズボン、その中心部が——盛り上がっている。
「このガキ、自分の女が他の男にイカされてるのを見て勃起してやがる！
しかも尻子玉抜いてるから意識もねえはずなのにな！！」
そう。翔太は意識もないままに、その陰茎を膨らませていたのだ。
それは彼が淫気を鎮める特異体質にあり、この場に満ちる淫気に反応したものか。
それとも、愛するものを寝取られる鬱勃起か。
「ある……あるじ殿……そんな、こんな……ううう…！」
マライヤもまた悲しみに落涙する。その二人の姿を見比べて、
河童入道はまた下卑た笑みを浮かべた。
「これじゃああんまりにもあのガキが可哀想だから、
お慈悲ってやつをくれてやんないとなあ」



翔太に近づいた河童入道は少しだけ彼を捉えているロープの高度を下げ、ズボンをおろしてやる。翔太の年に似合わぬ立派な一物が外気を浴びそそり立つ。次に河童はマライヤを抱きかかえると両腕を抑え込み、再び自分の肉棒を彼女の膣内に挿入した。そのまま翔太の下まで来るとマライヤを抱えたままねそべる。すると、マライヤの尻が翔太の股間にちょうど重なった。

「き、きさま……なに……をおっ……！！」
「悪いけど元あるじ様あ、前の穴はもうオラの専用あかんぼ部屋なんでえ、ケツ穴で我慢してくださいなあ。ぐあばばば！！！」

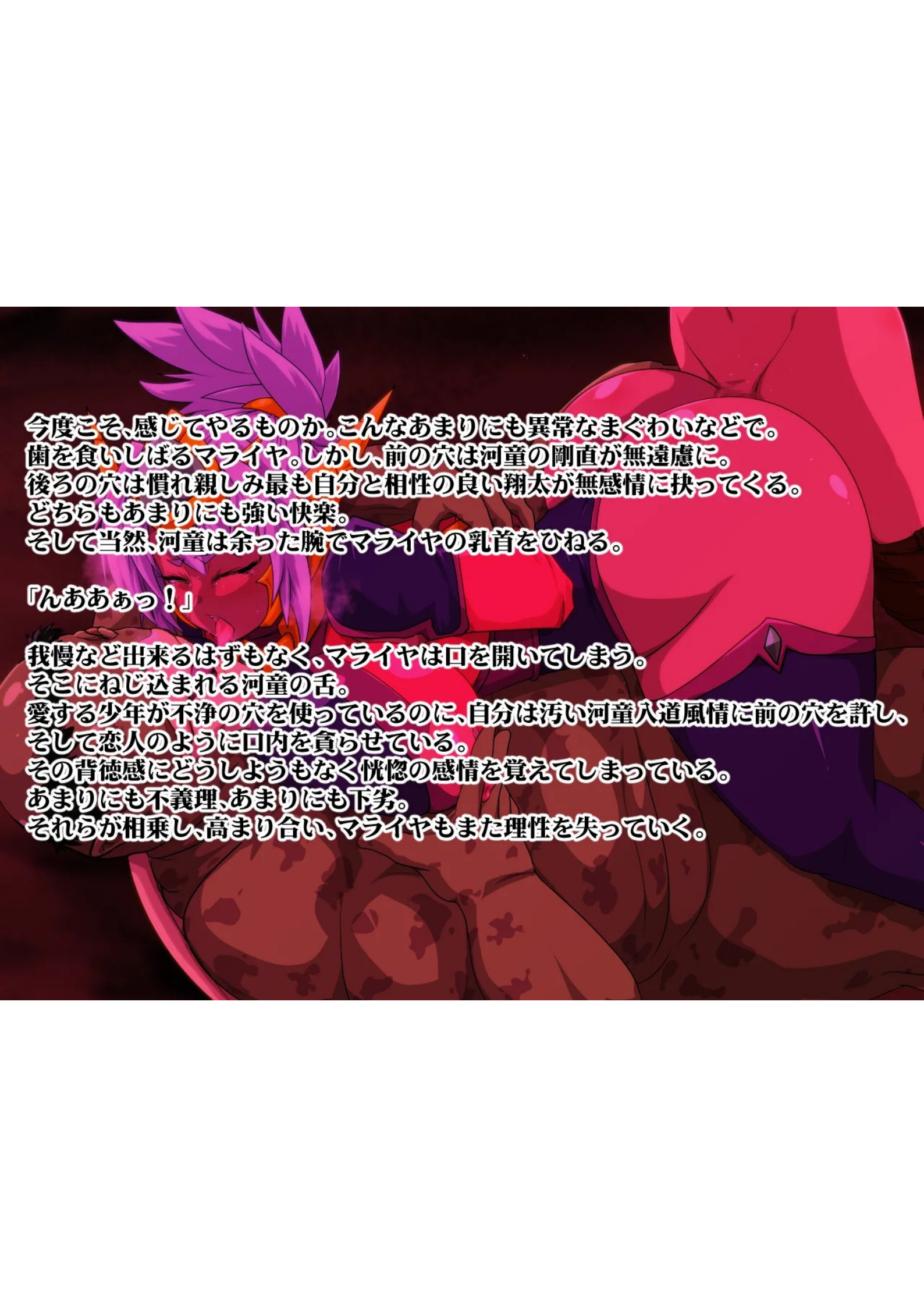
河童がマライヤを突き上げると、それに合わせて浮かぶ尻。そして吸い込まれるように、マライヤの菊門は翔太の陰茎を受け入れてしまった。

今更なああに
我慢してんだあ？

せつかく
あるじ様の
ちんぽがケツ
掘ってくれて
んじゃねえが

さっきみたいに
めいっばい
喘げばええど





今度こそ、感じてやるものか。こんなあまりにも異常なまぐわいなどで。
菌を食いしぼるマライヤ。しかし、前の穴は河童の剛直が無遠慮に。
後ろの穴は慣れ親しみ最も自分と相性の良い翔太が無感情に抉ってくる。
どちらもあまりにも強い快樂。
そして当然、河童は余った腕でマライヤの乳首をひねる。

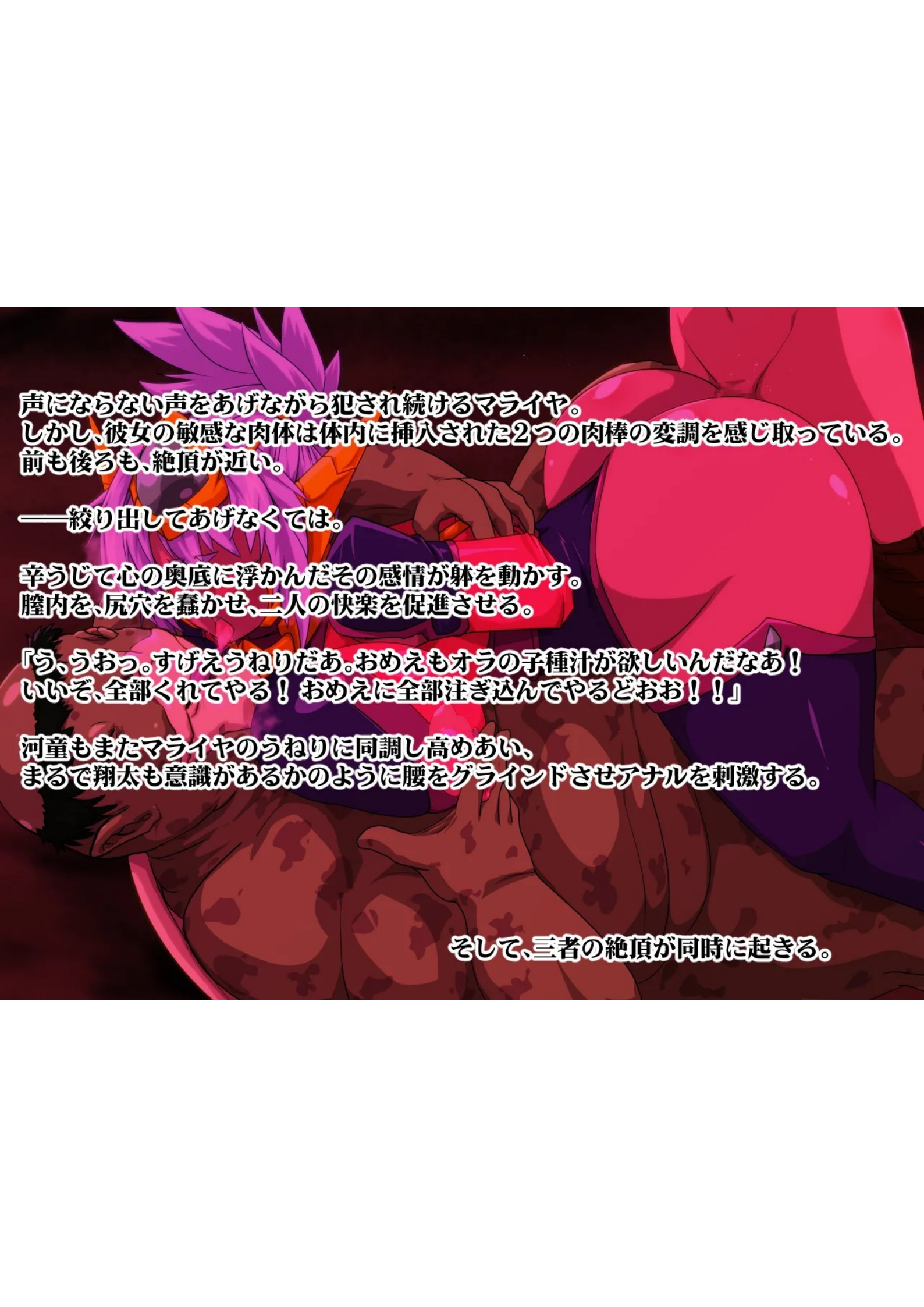
「んああっ！」

我慢など出来るはずもなく、マライヤは口を開いてしまう。
そこにねじ込まれる河童の舌。
愛する少年が不浄の穴を使っているのに、自分は汚い河童入道風情に前の穴を許し、
そして恋人のように口内を貪らせている。
その背徳感にどうしようもなく恍惚の感情を覚えてしまっている。
あまりにも不義理、あまりにも下劣。
それらが相乗し、高まり合い、マライヤもまた理性を失っていく。



ぐぼぼっ♡
愛しのあるじ様を
差し置いて♡
舌で舐め愛♡
だまらんなああ♡

これでもう
おめざんは
完全におらの
嫁っ子だ♡
最高の一発
射精てやるどお♡



声にならない声をあげながら犯され続けるマライヤ。
しかし、彼女の敏感な肉体は体内に挿入された2つの肉棒の変調を感じ取っている。
前も後ろも、絶頂が近い。

——絞り出してあげなくては。

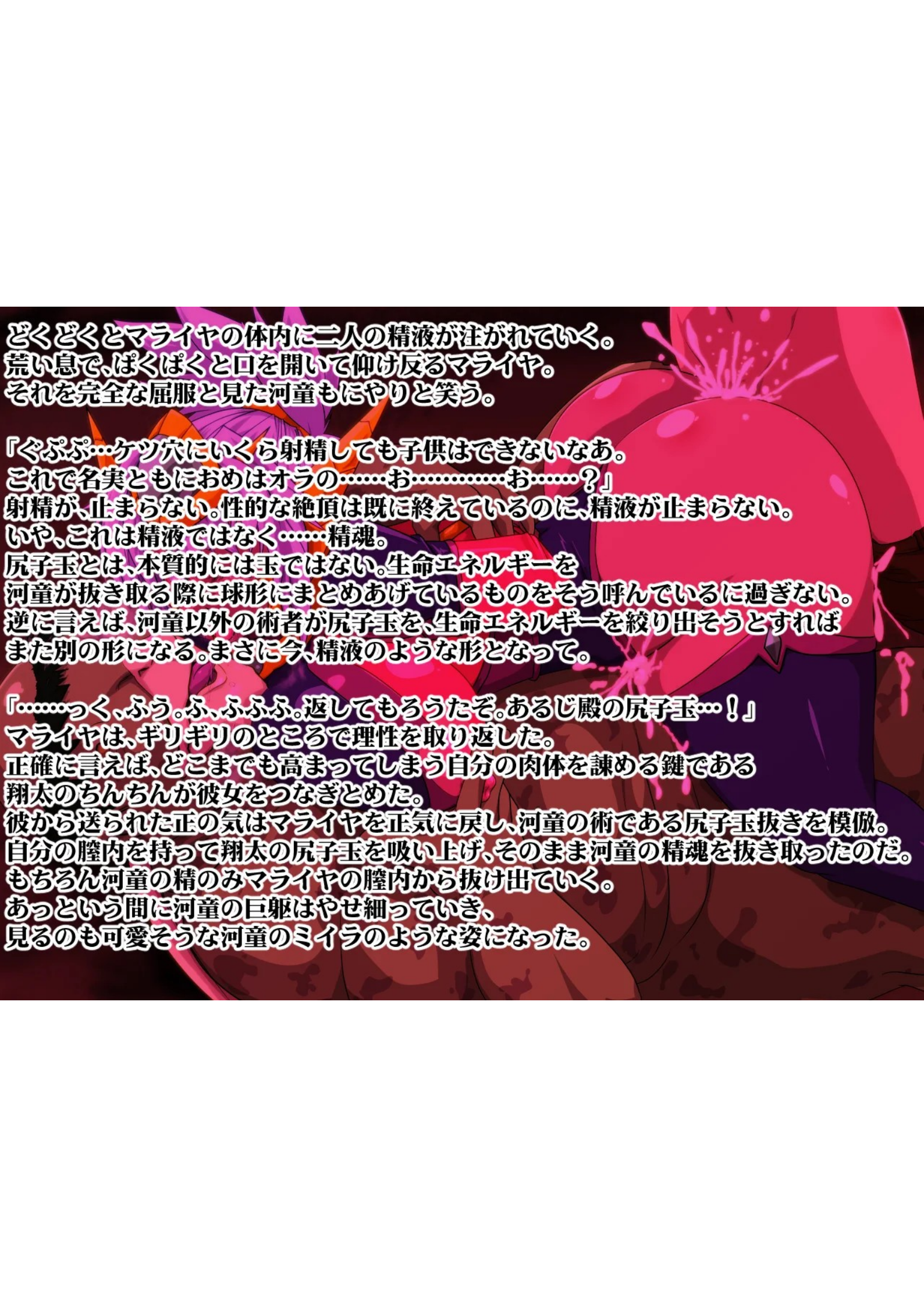
辛うじて心の奥底に浮かんできたその感情が身を動かす。
膣内を、尻穴を蠢かせ、二人の快楽を促進させる。

「う、うおっ。すげうねりだあ。おめえもオラの子種汁が欲しいんだなあ！
いいぞ、全部くれてやる！ おめえに全部注ぎ込んでやるぞおお！！」

河童もまたマライヤのうねりに同調し高めあい、
まるで翔太も意識があるかのように腰をグラインドさせアナルを刺激する。

そして、三者の絶頂が同時に起きる。

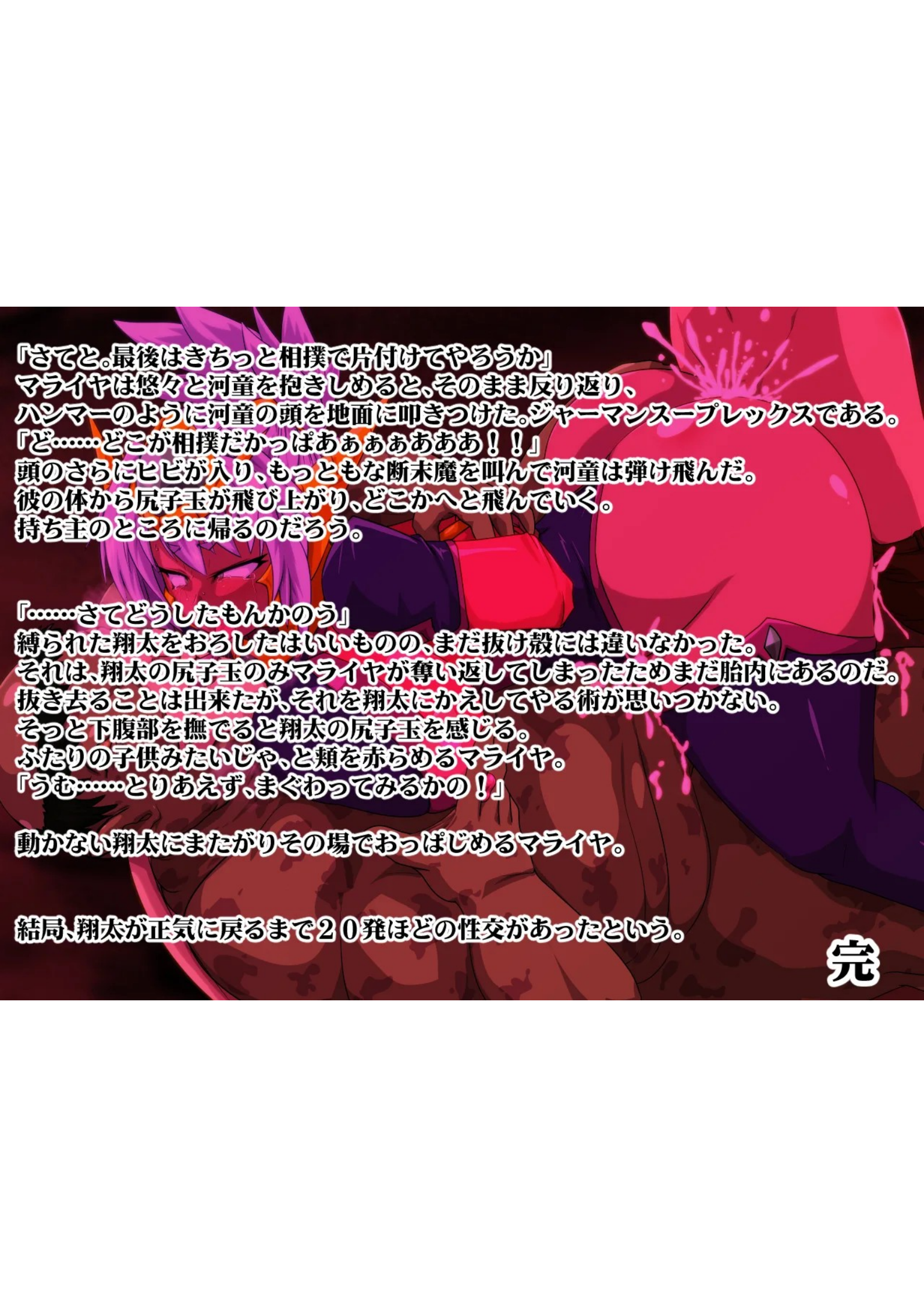




どくどくとマライヤの体内に二人の精液が注がれていく。
荒い息で、ぱくぱくと口を開いて仰け反るマライヤ。
それを完全な屈服と見た河童もにやりと笑う。

「ぐぷぷ…ケツ穴にいくら射精しても子供はできないなあ。
これで名実ともにおめはオラの……お……お……？」
射精が止まらない。性的な絶頂は既に終えているのに、精液が止まらない。
いや、これは精液ではなく……精魂。
尻子玉とは、本質的には玉ではない。生命エネルギーを
河童が抜き取る際に球形にまとめあげているものをそう呼んでいるに過ぎない。
逆に言えば、河童以外の術者が尻子玉を、生命エネルギーを絞り出そうとすれば
また別の形になる。まさに今、精液のような形となって。

「……っく、ふう。ふ、ふふふ。返してもろうたぞ。あるじ殿の尻子玉…！」
マライヤは、ギリギリのところで理性を取り返した。
正確に言えば、どこまでも高まってしまう自分の肉体を諫める鍵である
翔太のちんちんが彼女をつなぎとめた。
彼から送られた正の気はマライヤを正気に戻し、河童の術である尻子玉抜きを模倣。
自分の膣内を持って翔太の尻子玉を吸い上げ、そのまま河童の精魂を抜き取ったのだ。
もちろん河童の精のみマライヤの膣内から抜け出ていく。
あっという間に河童の巨軀はやせ細っていき、
見るのも可愛そうな河童のミイラのような姿になった。



『さてと。最後はきちっと相撲で片付けてやるうか』
マライヤは悠々と河童を抱きしめると、そのまま反り返り、
ハンマーのように河童の頭を地面に叩きつけた。ジャーマンスープレックスである。
『ど……どこが相撲だかっばああああああ！！』
頭のさらにヒビが入り、もっともな断末魔を叫んで河童は弾け飛んだ。
彼の体から尻子玉が飛び上がり、どこかへと飛んでいく。
持ち主のところに帰るのだろう。

『……さてどうしたもんかのう』
縛られた翔太をおろしたはいいいものの、まだ抜け殻には違いなかった。
それは、翔太の尻子玉のみマライヤが奪い返してしまったためまだ胎内にあるのだ。
抜き去ることは出来たが、それを翔太にかえしてやる術が思いつかない。
そっと下腹部を撫でると翔太の尻子玉を感じる。
ふたりの子供みたいじゃ、と頬を赤らめるマライヤ。
『うむ……とりあえず、まぐわってみるかの！』

動かない翔太にまたがりその場でおっぱじめるマライヤ。

結局、翔太が正気に戻るまで20発ほどの性交があったという。

完























